HALF TIME

連載

FACE TO FACE

Dr. N. Furuyama

ドクター古山の ルックスアップ講座

50周年を迎えた「自由が丘 女神まつり2024」の開催にあわせて、自由が丘駅近くにある「自由が丘クリニック ビューティーテラス」内で、古山先生の絵画展が開かれた。ウィンドウ内に飾られた色彩豊かな古山作品に、通行く人たちが足を止め、じっくり見入っている。そのファンタジーが織りなす世界観にわれわれ編集部の足も止まった。

個展開催編

10月13日～14日に行われた「自由が丘 女神まつり2024」。自由が丘の街のいたるところでワインコーナー、オープンカフェ、ワゴンセールなどを楽しむことができる、毎年約50万人が来場する自由が丘の大イベントで、今年は50周年を迎えたそう。例年以上の賑わいをみせるなか、13日午後には能登半島地震復興支援トークショーが行われた。自由が丘駅正面口に設けられた特設ステージには、「モンサンクレール」オーナーシェフの辻口博啓さん、石巻市魚流通協会・林正隆さん、自由が丘在住で元ヤクルトスワローズの川崎憲次郎さん、自由が丘商店街振興組合理事長・岡田一弥さんとともに古山先生も登壇。「地震発生直後からドクター、ナース、患者様も含めて募金活動を行いました。自由が丘クリニックは女性が多く働く職場ですので、女性の視点に立った支援を行っています。東日本大震災の時は紙ショーツを3万個、避難所にお届けしました。今回もそれに準じる支援を進めています。また提携しているヘアサロンと協力し、被災者の方に無料でカット・シャンプーを行う活動が始まっています」と活動報告した。

このイベント開催に合わせ、自由が丘駅近くにある「自由が丘クリニック ビューティーテラス」内で、古山先生が描いた絵画を一堂に集めた初めての個展が開催された。街を行きかうカップルや、紳士、淑女が足を止めて、色彩豊かな作品に見入っている。きっそく編集部は古山先生のインタビューへと向かった。

「私は絵画を詳かに習ったわけではありません。趣味として楽しんでいます。これからますますAIが進歩し、かなり高度なイラストレーションも人間に代わってAIが描いてくれる時代が訪れるかもしれません。SNSの動画では、AIが顔を修正して目を大きく見せてくれたり、実在する人物を使ったフェイクニュースも簡単に作れたりする時代になりましたからね。しかしAIが発達すればするほど、AIにはできないこともはっきりしてきたと思うのです。キーワードは、『相』『間』『気』です」。

AIが作ったキャラクターは美男美女かもしれないが、どこか生気のないのっぺりした人形のような印象がある。「相」が弱い印象だ。話し方も通り一遍で原稿を棒読みしているような感じがする。「間」が悪い。そして、相手に元気を与えるようなエネルギーに乏しい。「気」が弱いのだ。古山先生はこう指摘する。「良い『相』『間』『気』を生むものは、人間の五感だと思うのです。単純作業は機械や人工知能が得意としますが、定量化できないもの、人の心に働きかけるものは、人間の五感が生み出します。ですからこれからは五感を磨く練習をした方が豊かな人生を送るためには大切なことではないかと思いますね」。

今回の個展のテーマは「色と旅をする」。絵画を描くとき大切にしている

古山登隆
（ふるやまのぶたか）
日本の美容医療をリードするパイオニア的存在。メスを使わないノンサージェリー施術を得意とし、ボトックスやヒアルロン酸注入、糸によるたるみの治療など、世界トップクラスとして高く評価されており、注入指導医のヘッド・ファカルティとして国内外の美容医療の発展に貢献している

10月13日と14日に行われた「50th ANNIVERSARY 自由が丘 女神まつり2024」を取材した。13日の午後、古山先生は「高齢半島地震復興支援トークショー」のステージに登壇。「美容医療に関わる者として、女性の視点に立った支援を考えています」と、自由が丘クリニックの持ち味を生かした復興支援活動について報告した

のは色調だと先生はいう。「色と遊ぶことが大好きなんです。どんな色を好むかは、育ってきた環境の影響が大きいかもしれません。私が絵を描くときは、たとえば茶系やグレー系の色を使うことはほとんどありません。そういう色にはあまり接することなく育ってきたということなんだと思います。原色が好きなことは以前から自覚していたのですが、絵を描くことによってどんな色の組み合わせを自分自身が、面白い、と感じるのか興味がありますし、今まで自分でも気づかなかった組み合わせの妙を発見するかもしれない、そんな期待感もあります」。

古山先生が一枚の絵を描くのに費やす時間は4時間ほど。構図と使う色が決まれば一気に仕上げるが、構想にかかる時間はかなり長いそうだ。また、アイルランドや北欧諸国の色使いも好きだと語る。確かにフィンランドのマリメッコなどの北欧のブランドはヴィヴィッドな色使いを得意とする印象がある。

先生は、自由が丘クリニック内のインテリアやアートのレイアウトなどを通じて心地よく時間を過ごせる空間づくりも自らの手で行っている。

「予約が取れないレストランは、味が素晴らしいことは当然ですが、空間づくりが上手だと思います。ゆったりとした時間を過ごし、シェフの料理を満喫できる、落ち着いた空間を作っている。それは色の配置もそうですし、照明の加減、流れている音楽も含め、す

「色と旅をする」というテーマで絵画の個展を開催しました。

自由が丘クリニック ビューティーテラス内に展示された古山先生の絵画作品の数々。豊かな色彩感がテラスの空間を満たす。通りがかりの人たちも数多く足を止め、鑑賞していた（左上写真）

丸い月は古山作品のモチーフのひとつ。これからの季節に飾りたくなる一枚だ

Written by Kazuyoshi Saito / photographed by Hiro Nozaka

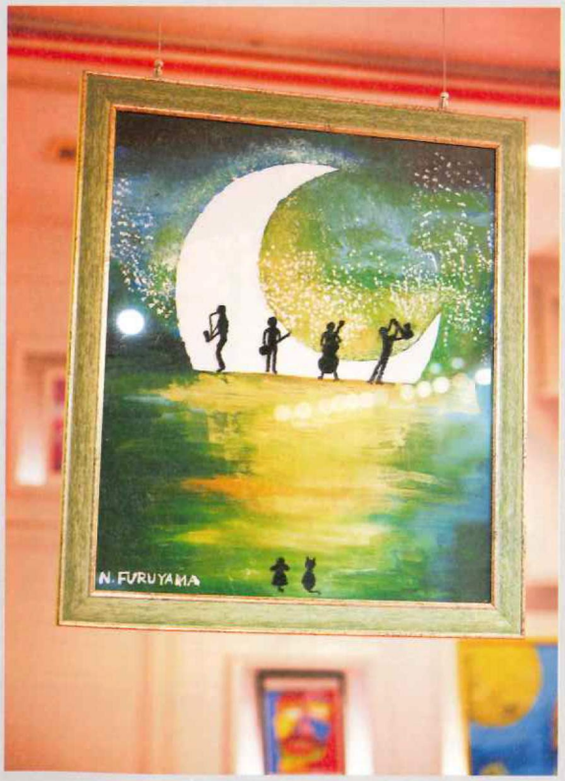
っとこの場にいたい〟、〝また訪ねたい〟と感じさせる空間の魅力があります。そういった人気のレストランには、自由が丘クリニックの空間づくりにも参考にさせていただきたい要素がたくさんあります。クリニックの室内は、ドクターも、患者様も長い時間を過ごす空間です。その空間の『気』を良くすることは非常に大切だと思います。『気』が良い空間には、自然に人が集まってくるようになります。普通、病院のインテリアといえば白が基調で、赤のような派手な色を取り入れることはタブー視されてきました。しかし自由が丘クリニックでは、私が描く絵画も含め赤い色を取り入れています。これまでの医療界の通念では、香りも避けられてきました。自由が丘クリニックではそうした固定観念をもう一度検証し直し、『気』を良くするための試みを継続的に行っています」

古山先生は青年医師時代、師匠の塩谷先生から徹底的に人物のデッサンを描き続けるよう指導を受けた。その経験を通して人の顔のフォルムの美に精通したから、趣味で色彩を楽しむようになったのかと思ったら、決してそうではなかった。「私はノンサージェリーの専門家です。形・フォルムの専門家は、むしろサージェリーを専門とするドクターなのです。例えて言えば、サージェリーの専門医は〝アルティザン〟です。一方、ノンサージェリーの意思はアーチストに近い能力を要求されます。肌の色の濃淡や、理想的なフェイスラインをアーティスティックに表現するのがノンサージェリーの美容医療です。事実、メイクアップの技術と、ヒアルロン酸を注入する技術は、数多くの共通点があります。メイクアップでチークを入れたり、ブラシを滑らせたりする位置と、ヒアルロン酸を注入する位置が同じ、ということもよくあるんですよ」

色彩感覚を磨くことはノンサージェリーの施術の技術とも密接な関係にあることがよくわかった。古山先生が趣味の絵画で色と遊び、色と旅することは、施術医として飽くなき進歩を求めていることに他ならない。

これらの絵は空間づくりにも役立っています。

絵画は趣味でもあり、五感を磨く鍛錬でもあるという。古山先生の感性が、自由が丘クリニックの「相」「間」「気」を向上させ、働くスタッフにも訪れるお客にも心地よい空間を提供している。↓個展会場でひと際目立ったジャズメンをモチーフにした作品。やはり「月」がモチーフになっている



取材協力：自由が丘クリニック tel. 0800・808・8200 https://jiyugaokaclinic.com/